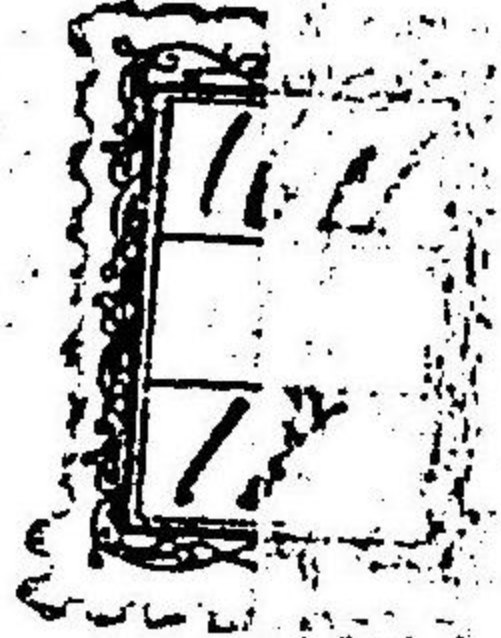


因果の枝折



019342-000-7

特50-773

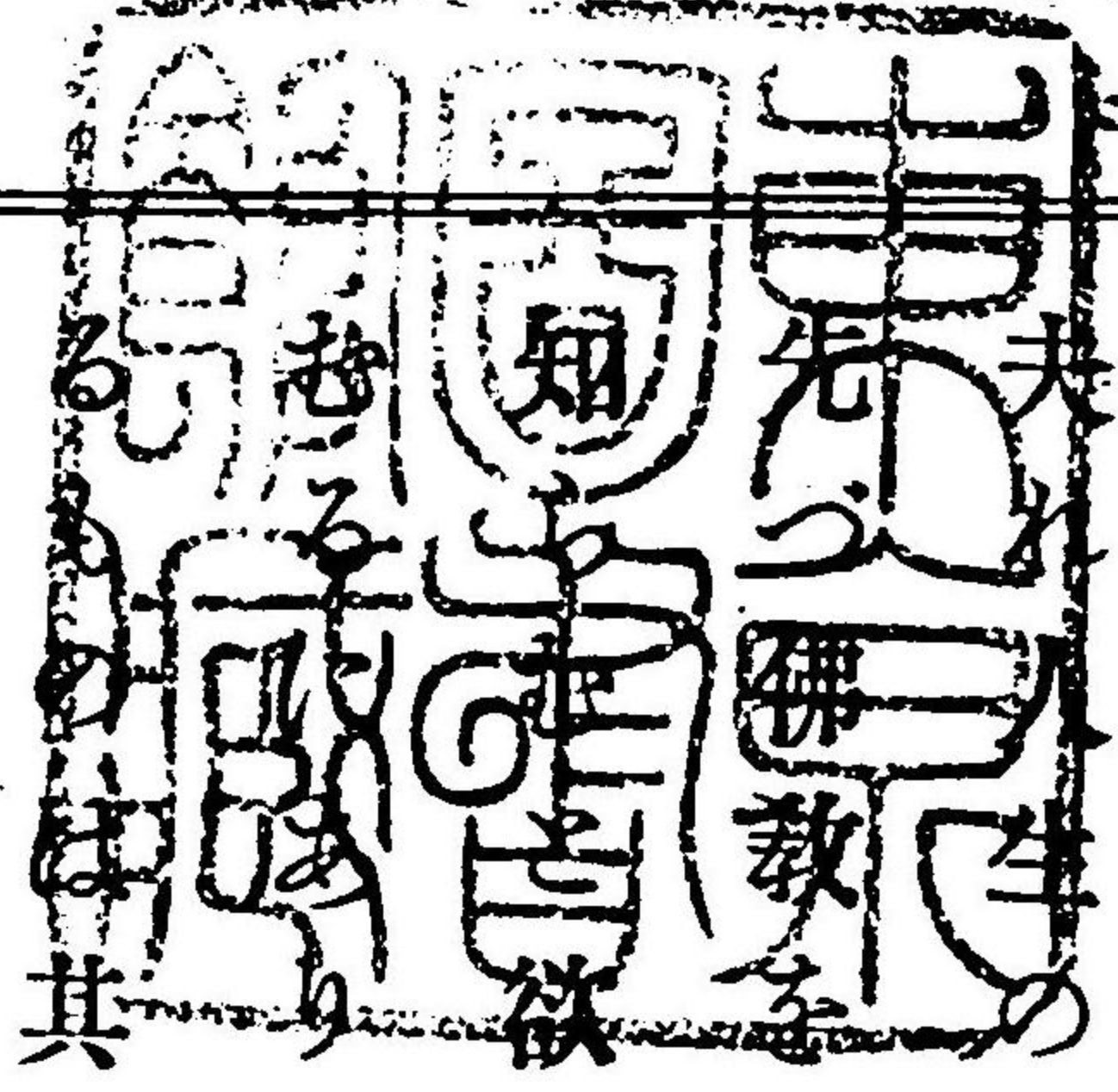
因果の枝折

高田 道見/著

M26. 12

ABG-0028





序言

夫れ生の始中終を知らむと欲するものは

先づ佛教を學ぶべし佛教の何物たることを

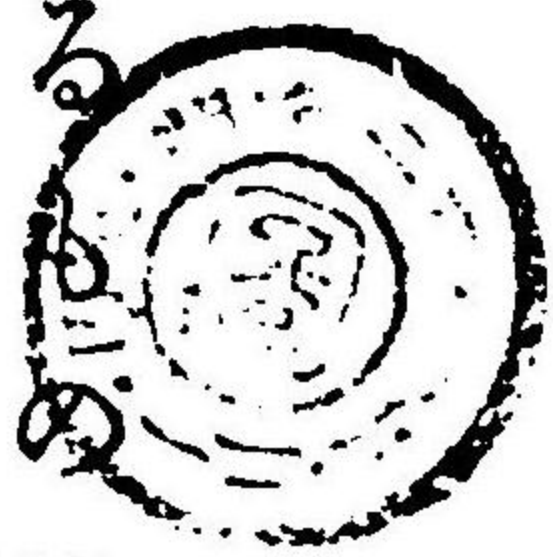
知るものは先づ因果の原理を究

めるものは其れ唯佛教なる歟佛教の他教に卓

越せる所以のものは即ち是れ因果論の深淵

高妙なるにあり此理法は天地萬有の一大原

高妙なるにあり此理法は天地萬有の一大原



則にして吾人は此原則に由て隠顯去來するものなり故に人生の原理を知るものは宇宙の眞理に於ても亦自から明晰ならむ謂ゆる人生なるものは善惡に始まりて苦樂に終はるものなりとす佛教は能く此道理を講明して處世の用心を示したるものなり其法實に千態萬狀なりと雖も茲に一二を抽摘し以て天下初心の有志に便りす故に題して因果の

枝折と名く

時に明治二十六年癸巳の十二月一日

東京紫坡の萬年寶窟に在て

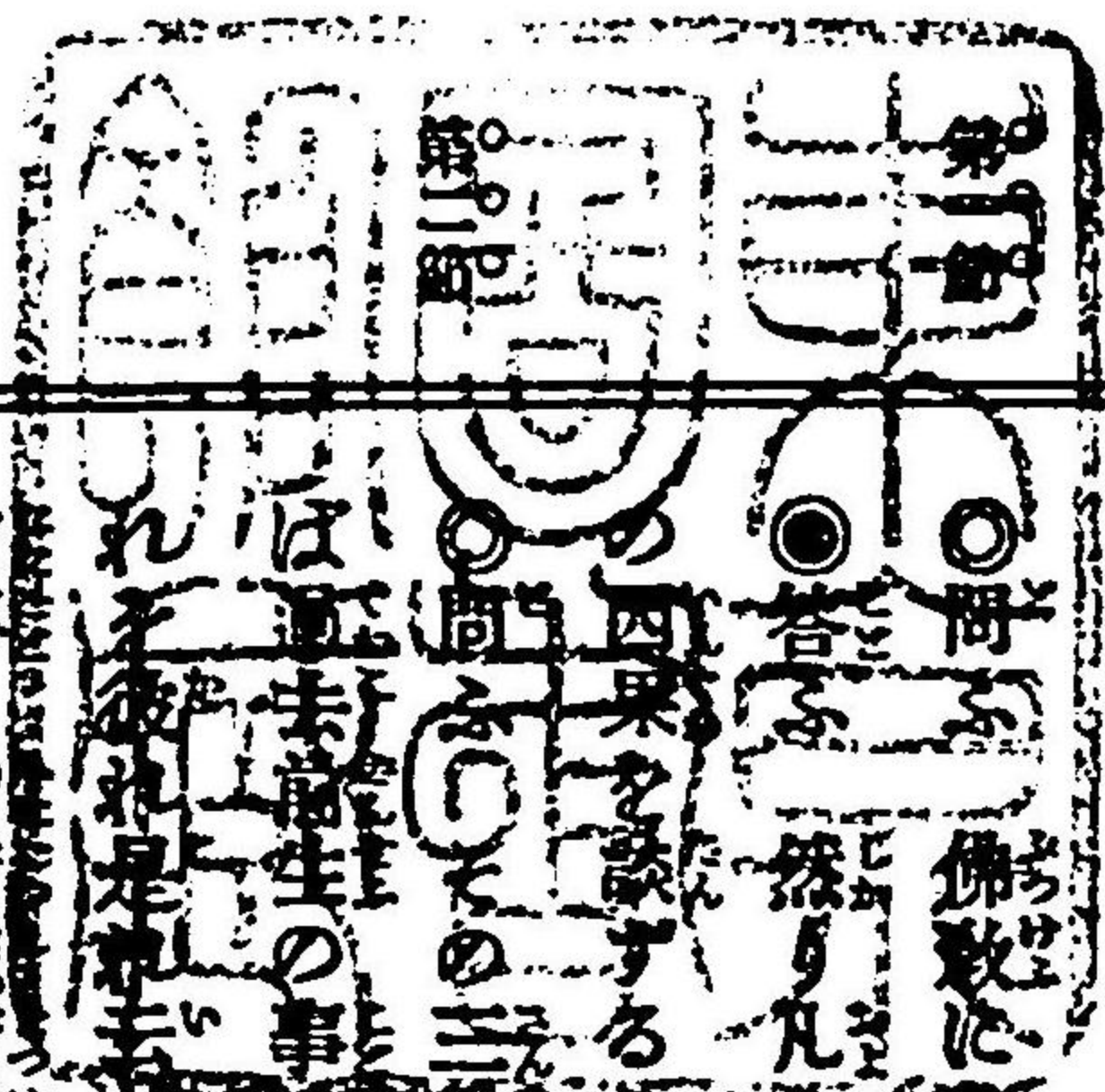
編述者識

凡例

- 一本書は佛教を知らざる人の爲にその初門を示す
- 一本書は善惡因果の道理を簡短に示す
- 一本書は始終問答躰にして十九節々に長短あり
- 一本書には面山和尚の善惡因果論を摘録して之を示す
- 一本書には雲樞老人の三時業落草談を引證して之を示す
- 一本書には行誠上人の三世因果論を摘録して之を示す
- 一本書には白隱禪師の施行歌及び一休和尚の歌をも載す
- 一本書には佛說因果經等の要文を引證して之を示す
- 一本書は需めに應じて卒爾に之を編述せるものなり

因果の枝折

高田道見編述



問 佛敎にては何でも彼でも皆因果業報と云ふ、果して然るものなりや

答 然り凡そ世の中に有りとも有ゆるものは、皆因果業報ならざるものはなし、その因果を説するや必ず三世の因果を説す、その業報を説くや必ず善惡の業報を説く

問 問ふ所の三世因果善惡業報と云ふことは、容易に信じ難き事柄なり、如何となれば

答 未だ前生の事と、未來後生の事は、畢竟見るべからず知るべからざるものにて、それを見れば是れも亦は、只人類の臆測にて實際の證據が分るものにはあらず、今の世は何事も皆實観實驗にあらざれば一も確信すること能はず、然るを前世じや未來じやなぞとて迂遠な事を云ふは甚だ受取り難き事共なりと思ふ、されども何か今時の學理に合し、人情に適するの説き方も之あることなるか

●答ふ 嗚呼是れ何と云ふ事ぞや、佛敎に於て説く所の因果業報は皆人類知識の範圍

内に於て知るべき所の道理に外ならず、故に知るべからざるものあらば是れ因果の理にあらざる、蓋し因果の理は甚深廣大なるが故に、淺智のものには解し難き所のものなり、依て因果の理を知るものは智者にして、知らざるものは愚者なりとす、如何となれば人の知識なるものは因果の理を知るにありて、無識なるものはその理を知らざるにあり、今時の學理は果して佛教の因果に合するや、今時の人情は果して佛教の業報に適するや否やは保證すること能はざれども、今時の學理と今時の人情とを標準として佛教を論ずるは甚だ不可なりとす、如何となれば今時の學理は三世の因果を論ぜず、今時の人情は善惡の業報を知らず

◎問ふ 三世の因果善惡の業報を知るものを智者とし、知らざるものを愚者とすは只佛教者の手前味噌なり、何となれば佛教者外の者にも智者もあれば學者もあり、佛教者中にも愚者もあれば文盲もあり、且や今時の如きは佛教を知らざる者の知識優等にありて、佛教者の知識は却て劣等にあるが如し、何ぞ因果業報の理を標準として、人類の智愚を定むべきものならむや

◎答ふ 然らず因果の實理を知るものは僧俗を論ぜず、凡て之を智者とし、知らざるものは凡て之を愚者とす、智愚は元來人の精神上にあるものなり、而して精神思想の動きなるものは、唯眼前事物の真相を知るのみならず、既往の事も將來の事もよく之を知るの力を有するものなり、然るに世間の謂ゆる智者と云ひ學者と云ふものは、唯人類一世の事のみを知りて、過去の事も未來の事も知らざるものなり、否や一世の事をも實は知らざるものなり、その知れりと云ふは唯皮相の見のみ、故にその智は淺智にして、その學は淺學なるのみ

◎問ふ 何を以て爾か云ふや

◎答ふ 是れ三世の因果善惡の業報を知らざるが故なり、抑も世間万般の物にして、その形を顯はし相を現はすものは皆その原因あるものなり、原因なくして結果あるものはあらず、而してその原因は過去に屬し、その結果は現在に屬するものなり、その復結果の中に未來の原因を合て相續成長すと云ふは宇宙間本來の法則なり、故に原因の是非に由て結果の得失あり、原因の善惡に由て結果の苦樂ありと云ふは、誰人にも

よく了解し得べきの道理なりとす、故に三世因果の規則は、現在事物の真相を判断して、その知識を發達しその道理を明瞭にする所以のものなり、然るにその過去を論ぜず未來を談ぜずして現在の事物を知らむとするもの、争で事物の真相を判断し得たりと云ふべけむや、故に謂ふ淺智淺學なりと、而して因果の規則なるものは、外界非情の上にも應用すべきものなれども、重に内界有情の上に就て之を論ずるものなり

○問ふ そは又如何なる道理のものなりや

○答ふ その有情と云ふは、非情の山川草木とは異なり、凡そ生とし生けるものは皆有情なり、之を分類するときは六凡四聖となる、謂ゆる六凡とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上是なり、四聖とは聲聞、緣覺、菩薩、佛陀是なり、その凡聖を合して十界となる、その十界中にも一々分類するときは無量無數となる、此諸の有情は何故に此宇宙間に生息し居るや、如何なる原因によりて此無數なる結果を生じ來りたるやと云ふことを研究するのが因果業報の規則なり

○問ふ その因果業報と云ふは唯物の變化遷轉する作用に過ぎざるものと思はる、そ

の物の實體は如何なるものなりや、その實體なくして作用を現するものはなし

○答ふ その實體なるものは地水火風空識の六種のものありて此宇宙間に徧在せり、是を六大とも云ふ、此物は到る處として徧在からざる所なきが故に六大と云ふ、此六大が有情と成り非情と成り、天地と成り世界と成り居るものなるが故に、我等人類の身軀は五大より成り立ち、精神は識大より成り立ち居るものなれば、此身心は全く因果業報の本體實質なるものなり

○問ふ その六大は平等なるものなるに、何故に六凡四聖の差別を現するや

○答ふ その五大を色法と云ひ、その識大を心法と云ふ、此心法が因と爲り、此色法が縁と爲り、因縁和合して万差の諸法を現するなり、此色心二法を合して分拆するに小乗にては七十五法と云ひ、大乘にては百法と云ふ、天台の教判にては十界三千の諸法と云ふ、更に分拆すれば無量無數と成る、之を總稱して万法と云ふ

○問ふ さればその色心二法は實に万法の根本なりや

○答ふ 然り然れどもその根本を小乗にては法界と云ひ、大乘權教にては唯識と云ひ、

大乘實教にては一心又は真如と云ふ、その外種々の名義あり

◎問ふ その色心二法なるものは本来一なるものなりや異なるものなりや

◎答ふ そは一に非ず異に非ず、故に總稱して之を法界と云ひ、唯識と云ひ、一心と云ひ真如と名けたるものなり、故に色法は有の如く心法は無の如し、有無色心の二法が表裏を爲して同躰不離なるものは、此真如なり、此一心なり、此唯識なり、此法界なり、此身心なり、此有情なり、此人類なり、此天地世界なり、故に天地は一枚にして身心は不二なり、万法は是れ真如にして、真如は是れ万法なり

◎問ふ その色心二法は何故に万差の諸法を現するや

◎答ふ その色心とだに云ふときは、如何にも單純なるもの、様なれども、その中には複雑なる種子乃ち原因を含めるものなり、故に色に無量の色あり、心に無數の心あり、此無量無數の色心が交渉するによりて千變万化の諸法を現するものなり、謂ゆるその因なる心は色を緣じ、その緣なる色は心を緣ず、因は力の強きものなるべく、緣は力の弱きものなるべし、此因縁和合し強弱相引くことは、過去の過去際より、未來

の未來際まで是の如くにして、その始めもなくその終りもなきものなり

◎問ふ されは色心和合の諸法は、自もなく他もなく、彼れもなく此れもなく、都盧一平等なるものなりや

◎答ふ 然り平等の本躰より見るときは万法一如なれども、差別の當相より見るときは、然らず自もあり他もあり、彼れもあり此れもあり、三界もあり十界もある、松は竹に非ず竹は松に非ず、權兵衛は八兵衛に非ず、八兵衛は權兵衛に非ず、梅は梅なるべく、櫻は櫻なるべし、鶴の長きを以て鴨の短きに續ぐべからず、故に法は法位に住して世間の相常住なりと説く、故に個人はどこまでも個人にして、世を越へ生を經るども個人なれば、他時異日後生未來に於て、他のものと己れと合して、その個人なるもの、資格を失ふが如きものにはあらず、故に自己はどこくまでも自己なるべく、他人はどこくまでも他人なるべし、自己と他人とは万劫千生別なるが故に、自尊の氣象をば万劫未來に發達し、尊他の思想をば千生億劫に忘却すべからざるものなり

◎問ふ されば自己乃ち個人なるものは、無量の過去際より無數の未來際まで、無始

無終に相續不斷なりと云ふの意味なりや、

●答ふ 然り、多物が合して一物と成り、一物が開けて多物と成るには非ず、換語して曰へば、多人が合夥して一夥と成り、一夥が分開して多人と成るにはならず、或る場合に於ては一人にして五人十人の子を生ずることあれども、その原因と結果とは各々別なるものなり

○問ふ 果して然らば人間は万劫千生の間だ人間なるべく、畜生は万生万死の間だ畜生なるべし、同じ人間の中に於ても、智者は何時までも智者なるべく、愚者は何時までも愚者なるべくか

●答ふ 否なく予が今まで陳べ來りたるものは、實跡本質に就て差別の當相を論じたるものなり、故に因果業報の本跡とその作用とを混ぜべからず、その謂ゆる人畜鳥魚智愚利鈍の如きは、その作用に現はれたる幻相なるが故に必ずや轉變無常なるものなり、依て人間は万劫千生人間なるべくにならず、畜生は万生万死の間畜生なるべくにならず、智者も万劫智者なるべくにならず、愚者も千生愚者なるべくにならず、故

に佛教には六道の輪廻を説く、その輪廻して苦樂の報を受けるものは、皆善惡の業に因るものなりとす、その六道の中修羅人間天上は善處にして、地獄餓鬼畜生は惡處なり、善の更の上善を造るものは聲聞緣覺菩薩佛界にまで昇る所以のものなり

○問ふ 何物が善惡の業因を造りて、苦樂の果報を受けしむるや
●答ふ 是れ決して他物の爲す所にならず、佛教にては自業自得自作自受と教ふるなり、是れ獨り人類のみならず、六道十界皆然りとす、唯自分に作りて自分に受るのみ、若し他人を恨むるが如きことあらば、まづ自身を恨みざるべからざるなり

○問ふ 佛者動もすれば地獄極樂の談を爲して愚民を誑かさむとす、是の如きは昔日の野蠻世界には一の方便なれども、開明の世界にては之を信するものなからむとす、然るをも察せずして矢張地獄極樂の談を爲す、是れ果して何の心ぞや

●答ふ 是は甚だ案外千万の事なり、佛教は耶蘇教の如く時勢に連れてその説を變ずべからず、野蠻世界と雖も文明世界と雖も、今も昔も佛教は同一佛教なり、佛教の目的標準とする所は只是れ地獄極樂の談なり、地獄極樂は實に是れ佛教の神髓骨目なり

神髓骨目を以て愚民を誑惑するの方便なりとせば、佛教は遂に説くべからざるなり、故に云ふ案外の事なりと

◎問ふ 然れども地獄極樂の有無は分明ならざるにあらずや、その不分明なるものを擔ぎ出して、分明らしく説き立つると雖も誰か之を信するものあらむや

極善の果
極惡の果

◎答ふ 是は最も皮相の見なり、未だ毫も佛教の理を知らざるが故にその謗言を吐く、居れ吾れ且く汝に語らむ、上に十界を列ねたるが如く、その極樂なるものは佛陀の境界にして善の最極上々なるものなり、その地獄なるものは惡の極惡下々なるものなり

一心の所

若し經論釋によりて地獄極樂の躰相を談ふは中々一朝一夕の事にあらざれども、今は只その要を取て之を言はむ、その謂ゆる十界なるものは元來一心の所現なるが故に、善

主觀の地
客觀の地

心善業の結果は極樂となり、惡心惡業の結果は地獄となり來る、凡そ一切の諸法は皆主觀より客觀に顯はるゝものと知れ、世人の疑ふ所の地獄極樂はその客觀なり、謂ゆる極樂は十萬億土の西に在りと云ふの談と、地獄は此南閻浮提の地下に在りと云ふの

説とは是なり、若し此説の如くならば余輩も亦疑ひなき能はず、何となれば實驗の及ばざる所なるが故に

是心作佛
是心是佛

若し主觀に歸して之を云へば、甚だ了解し易きが如し、觀無量壽經に、是心作佛、是心是佛と云ふことあり、又阿彌陀經に、極樂世界去此不遠と云ふことあり、要を取て之を云ふに此身心清淨なれば是れ佛陀にして、此佛陀の住する所は盡地盡界悉く是

一休の歌
數首

れ極樂淨土なり、此身心不淨なれば是れ地獄の衆生にして、此衆生の住する所は天地宇宙悉く是れ極苦穢土なりと云ふべし、故に一休の歌にも「極樂も地獄も己のが身にありて、心こそなれ鬼や佛に」又云く「極樂も地獄も我にあるなれば、惡念起る心制せよ」又云く「阿彌陀佛悟れば即ち去此不遠、迷へば遙か西にこそあれ」又云く「十方は唯の一心淨土なれ、衆生もつとめ己身彌陀佛」是等の簡單なる説明によりて甚深

己身陀佛
唯心淨土

廣大の佛説を親ふべし、信せずむば更に左の道歌によりて、自心に深く顧みよ、益する所少なからざるべし

目前の地
目前の極

地獄とは胸に辛苦の瘦せ我慢みな内證は火の車なり
極樂は直き人こそ參るなり曲れる心深くといめよ

目前の極

極樂は直き人こそ參るなり曲れる心深くといめよ

無量壽佛

三途の川

唯心所現

第十七節

目に見えぬ地獄を胸に取りよせて我身を賣る我心哉
 程遠き南無阿彌陀佛の御國へもたゞ時の間に生れ行くなん
 足納はするとせぬとの胸の中地獄もあれば極樂もあり
 恐しき鬼の形を尋ねれば邪見の人の胸にこそ住め
 西方の本來空に往生し無量壽佛となるぞ目出度
 障りなく本來空に歸ることこれや西方往生と知れ
 昔人の貪瞋愚痴の惡水は三途の川の流れとぞなる
 地獄餓鬼畜生阿修羅佛菩薩何にならふとまゝ一念
 南無といふ内に定まる往生を唱へて後と云ふぞ墓無き
 是の如く主觀的より論ずるときは、佛界と地獄界のみならず、十界三千の諸法は皆是れ心の諸現なりと云ふことは明々白白たる事實にあらざるや
 ◎問ふ その地獄と云ひ極樂と云ひ、鬼と云ひ佛と云ふは皆心の所現なることは粗ぼ了解しぬ、されど還は只無形の地獄極樂にして、無形の鬼や佛やと云ふに過ぎず、そ

八種の肉

の有形なるが如くに説き立てるものあり、果して然るものありや
 ◎答ふ そは決して無しと云ふべからず、凡そ有形なるものはその無形なる状態より現するものなれば、一外に之を排斥すること能はず、然れども人間は只人間丈の果報なるが故に、人間外の事をば肉眼を以て之を見ること能はず、故に言語風俗は異なれども、人間社會丈は万国 悉く交際することを得べしと雖も、肉眼に見る所の畜生界の如きは、言語意思を通じ難きにあらずや、されば地獄も天堂も皆果報の異なる所なるが故に、その肉眼を以て見ること能はざるは必然の理なり、譬へば眼と耳とはその區域を異にして互に相知らざるが如し、眼は元來物を見る爲めの眼なれば、人間の眼も畜生の眼も同様なるべき等なれども、種々の差別あるを見よ(八種あり)
 一には借光眼、是は人類の眼なり、人類の眼は日月燈燭の光を借らざれば見ること能はざるなり」二には離光眼、是は牛馬犬猫及び鼠等の眼なり、彼等の眼は日月燈燭の光を離れて見ゆるなり」三には日光眼、是は鳩雀鷄の類の眼なり、彼等は夜る見へざるが故に、只日光のみに照されて眼の用あるなり」四には忌光眼、是は鴉

の鳥、又は鵲、蝙蝠の類にて、日光の爲めに眼が冥くなるものと云へり」五には遠細眼、是は鷹や鷲、又は鶴の類にて、十里以上の遠方にある餌をも之を見ることを得るなりと云へり、是は顯微鏡の如き眼を具へ居るものならむ」六には無睡眠、是は魚鼈の眼なり、彼等の眼は何時も塞ぐことなし」七には穿妖眼、是は犬猿の類にて、妖怪をもよく之を知るものなりと云へり」八には時變眼、是は猫の眼なり、時々變ずるが故なるべし

是れ皆業報の別なるが故なり、同じ畜類の中にも人間の眼に見へざるものあるべし、その地獄餓鬼修羅天上等も、或は此五大洲中に現存し居るも亦知るべからざれども、只果報異なるが故に、我等の眼に見へざるものならむ、支那日本の歴史中には、隋分冥土へ往來したることを記載しあるからには、皆々虚妄架空の記事にもあらざるべしと信ずるなり、故に人間の眼に見へぬからとて、之を妄誕虚構の方便なりと思ふは、研究の深からざるなり、研究の淺きを以て、甚深廣大なる佛教の眞理をけなすは、己の淺學なるを憚みざるべからず

◎問ふ 然らば主觀的地獄極樂と、客觀的地獄極樂と、その有無を争はず、只吾々人間を本位として少しく因果業報の理を談ぜよ

◎答ふ 因果業報の理たるや、甚だ複雑にしてその要領を得難しと雖も、聊か經論の取意を枝折として少しく之を語らむ、凡そ吾々人類の一生は、善惡に始まりて苦樂に終るものなり、故に善惡は業因にして苦樂は果報なり、その善惡苦樂の道理は一世を以て論ずべきにあらず、故に佛祖は三世に涉りて此因果の道理を明し玉ひしなり、何となれば上にも論じたるが如く、一切の有情は無量の三世に相續して斷絶せざるものなるが故に、世々生々の間には、種々の身を受けて種々の苦樂を受けるものなり、佛の説法多しと雖も、眞俗の二諦に過ぎず、眞諦の説法は平等の理を明し、俗諦の説法は差別の理を明したるものなり、今ま明さむとする所の三世因果の理は、即ち俗諦差別の法門なりとす、謂ゆる平等の理は辨じ易きが如くなれども、差別の理は甚だ解し難きが故に、古今東西の賢人聖者の中に於ても、釋尊の如く明瞭なる解釋を施されたるものは、世界廣しと雖も、恐くは一人も之なきなり、故に世尊を大覺者と稱し奉る、

而して

○面山禪師三世因果の理を論じて云く

須らく知るべし、因は種子にして果は果實なり、瓜を種ゆれば則ち瓜を得、茄を種ゆれば則ち茄を得、瓜は瓜茄は茄にして必然の理なり、善因善果惡因惡果も亦復是の如し、因果或は一世に係るものを順現業と曰ふ、今世に因を作て今世に果を得る、春稻を種て秋穀を收むるが如し、二世に係る者を順次業と曰ふ、今冬麥を種て來夏實を收むるが如し、多世に係る者を順後業と曰ふ、桃栗梨柿の子を下し、數年を経て實を收むるが如し、諸道は三世の因果を知らず、唯佛道のみ之を説く、佛の三世に通達する所以なり、因果外より來らず、只各々の自業耳、孔老は三世を説ず（耶蘇も亦然り回々も婆羅門も神道も亦然り）因果を言はず、怪神を語らずと謂ふと雖も、亦學ぶや祿其中に在りと曰ひ、積善の家には必ず餘慶有り、積不善の家には必ず餘殃有と曰ひ、善を作せば之に百祥を降し、不善を作せば之に百殃を降す等の語の如き、佛家に在ては則ち順現の因果なり、今且く一喻を説かむ、譬へは人有て粟の種子を持して、覆粟を知らざるの地に到て、一粒を出し人に視せしめ、此一粒の中に牡丹芍薬に似たるの花を含めり、花落て實成るも亦是の如きの種子、百千粒を包蔵すと曰はむ、若し未だ知らざる者は必ず疑ひ怪みて信ずべからず、傍に豫め之を知る人有らば定て疑怪の人を輕むじて、愚なり癡なりと謂ふ可し、孔老の學因果を信ぜざる者は、覆粟を怪むの類にして、而も佛は豫め之を知るの人なり、佛法の外道に異なる所以は則ち唯此因果の一件最も始め爲り

復須く知るべし、因は少ふして果は多きことを、世の米穀果樹と同じ矣、少善少惡の因、必ず多善多惡の果を招く、故に佛の曰く、諸惡莫作、衆善奉行と、多くの善果を招くが故に、少善の因と雖も、亦須く修すべし、多くの惡果を招くが故に、少惡の因と雖も亦須く止むべし、果を得ること遲速に依て亦多少の異あり、速に得る者は果少なく、遅く得る者は果多し、春穀の一粒秋穀の一粒を得るが如き者は少し、果樹の年を経て果を得る者は多し、今又修因の善惡も亦爾り、今世果を得る者は少なく、二世を待て果を得る者は多し、十世二十世を経て、乃至萬劫千生を待つ

者は果報彌多し、菩薩の六度萬行、諸佛の萬德圓滿共に爾り、皆順後業に係るなり、堯舜の大聖にして而も國は一身に止て、其子も亦不肖、及び孔子の陳蔡に困しめられ、顔回の短命なるが如き者は、過去惡因の順次順後の果に係るなり、其報盡て後、今世の聖德天下に布くの善因、來世必ず轉輪聖王の果を得可きなり、盜跖莊蹻が福壽を得るが如きも、亦過去順次順後の善果に係るなり、今世の惡因必ず來世を待て酬ふべきなり、及び其餘の聖賢にして而も貧窮に、頑鷲にして而も富貴に、或は帝位に登るの人斧鉞に辱しめられ、或は土實を荷ふの人乾符を握る、豈止一生の僥倖ならむや、悉く是れ前生因果の交謝代變に係らずと云ふこと無し是故に唯惡を止むれば惡果を招かず、善を修むれば善果を招く、善處に生ずれば即ち苦を受ること有ること無し、苦を受ること無きが故に佛道修し易し、若し惡處に生ずれば則ち苦を受ること多し、苦を受ること多きが故に佛道修し難し、恐れずむばある可らず、乃至若人之を撥無する者は僻せり愚なり、是故に但須く佛の三世因果善惡應報の說を信じて、攝律惡を止め、攝善善を修し、攝生他を利して常に自

受用三昧に安住して自己の光明を味まさいるべし』

と、三世因果の道理概ね斯の如し、見る人翫味熟讀するときは、大に智能を啓發して、自己の徳行を慎むに益ありと思ふ、凡そ佛教に依て知識を發達し、道徳を養成せむと欲するものは、必ずまづ因果の道理を信ぜざる可らず、その善因は必ず善果を生ずべく、その惡因は必ず惡果を招くべきことを知らば、寸善も必ず修すべく、微惡も必ず止むべき心に至るは必然の道理なり、更に又

○雲樞老人三時業の落草談に云く

夫れ佛道を修行するには、先づ因果の道理を明らめ知らねばならぬ、其因果といふは丁度粟や柿などを植へる様なもので、因は植る種ね、果は秋なつたる實の様なもの、粟の種を植れば粟をどり、柿の種を蒔けば柿が産る如く、善業をなすものは善の報ひを得、惡業を造る者は惡の報を得て、報ひの業を離れざることは、影の形に隨ふが如し、この造る所の業を因といひ、其受る所の報ひを果といふ、業報といふも因果といふも、其道理は同じことなり、それゆゑ業因といひ果報といふ、又善惡の

業の報ひを受けるに、三通りの時の次第がある、これを三時業といふ、一には順現法受業、二には順次生受業、三には順後次受業なり、設ひ善にもせよ悪にもせよ、此生に業を造りて此生に報ひを受けるを順現法受業といひ、又此生に業を造りて次の生に報ひを受けるを順次生受業といひ、又此生に業を造りて第三生目か、或は四生目か、乃至百千万生の間にてもあれ、其報ひを受けるをすべて順後次受業といふ、例へば米や菽は今年種を蒔て今年の中に其實をとる、是が順現法受業よ、又麥や蠶豆の類は、今年種を蒔て來年に至て其實を收むる、是が順次生受業よ、又桃や栗などは三年目、柿は植てから八年目にやふく實がなる、又天竺にある多羅樹といふ木は、植てから百年を経て、初めて實を結ぶとある、是等は順後次受業といふものなり、それゆゑ世間に常々心掛けて善根功德のみを勤むる身の上に、やゝもすれば災難に遭ひ、万事が左まへになりて、商ひすれば損をする、作りをすれば不作、奉公すれば還回る、其上妻が煩ふの子が怪我をしたのと、色々不幸に遭ふて、常に愁ひ苦む、又悪業ばかり造る人の身の上にも、吉事幸福雜沓して、商ひすればまふける、作りをす

れば豊年に逢ふ、奉公すれば立身する、家内打揃ふて無事災息、一年たちても樂り一服呑むこといらす、孫子も榮へて機嫌よく成長する、爲る程のことにはづがあふて常に歡樂を極むる、是を見て三時業を知らず、道理に暗き者は、業報などといふことは無いと心得て、因果を撥無するがまゝある、是れ斷見の外道にして大罪人なり、其勤めて善業を作しても、何事も不如意にして、常に愁を懷くは、先の世に造り置いた悪業の報ひがまだ盡きぬによりて、此世になしたる善業の報ひが現はれぬ、先生の悪報さへ盡れば、それから今の善報がそろく現はれて來る、又此世で悪業ばかり造る人が、當分万事に仕合が善ひとてあてにもならぬ、先生の善業の報ひが盡きてしまへば、又此世の悪業の果が報はねばならぬ、故に善報も積善せざれば盡る時あり、悪報も積悪せざれば盡る時あり、積善とは善業を造り積むること、積悪とは悪業を造り積むること、然れば善業は間ひの斷ぬ様にするがよし、悪業は積めぬ様にするがよし、譬へば五穀などの年々植て歳々其實をとれば、万代にも盡るといふことはなひ、それも又一年植へて翌年から植ぬ時は用ゐるに隨つて終には盡てし

まふ様なものなり、總じて業因の深ひと淺ひとによりて、受る果報に三時の差別はあれども、ちそひかはやひか、一度なしたる業の因、善惡ともに其報ひを受ぬと云ふことはなひ、然れども麥を蒔て米をとることならず、菽をしつけて粟にはせられぬ様なもので、善果報を得たひと思はれ、必ずよい種をまかねばならぬ、善惡ともに因果の道理すべてかくの如し、然れば少の惡をも恐れて造らぬがよし、又わづかの善でも願しく思ひ、悦で人にも勧むる様に心掛けるがよい、丁度春初一粒まけば秋フツササと一種に數万粒の米が出来る如く、因果の種はわづかでも、其報ひの果報に於ては、善惡ともに廣大に受る、又世間に心得ぞこなひのあるは、親が善事をなしたらば子孫も繁昌すべきものと思ふて居る矢先に、却つて子孫の代に衰微するもあり、親が惡事をなしたらば、子孫は不幸にありそうなる者が、却て子孫の代に繁昌するがある、是を見て因果といふはなひことじやなど、撥無する罪人が多い、佛法には自業自得果といふて、子が親にかはられず、親が子に代ることならぬ習ひなれば、子でも親でも眷屬でも、其餘々に作り置た持前限に報を受る、これを別業

自業自得

不定業

別果といふ、世に又父一人の功によりて子孫までも富貴を持ち、或は父一人の罪によりて子孫までも貧賤に及ぶもある、是を同業所感の報といふ、先生に造り置きたる業が同じきゆゑに、受る所の報も亦同じ、悉く皆自業自得果でないものはない、諸又業に定業と不定業とがある、定業は決して轉ずることならず、不定業は事によりては轉ずることもある、譬へば燈の風にふかれて消ゆると、油が無くなりて消ゆる様なもの、風にによりて消ゆるは不定業なれば、燈籠などで防ぎもなるが、油の盡きて消るは定業にていかにも防ぎ様がない、扱其業を轉ずることは、譬へば敵を討つ如く、此方が先の敵より強ひ時は必ず敵をほろぼす、又此方が先の敵より弱ひ時は却て敵にほろぼさる、善業の惡業に勝ち、惡業の善業に勝つことも亦復かくの如し、假令定業と雖も、今の業力がこれに勝つときは又轉ずる例もある

昔し憍薩羅國の勝軍王といふに太だ醜ひ姫がありて、其姫が一心に佛を念じ奉り、餘念なく慚愧懺悔せられたれば、其善業力の強きによりて、急に容顏美麗なる婦人に變じたと、大毘婆沙論に示してある、是は善業力が強ければ、此世に於て直に善

因縁

果を得たる例し

又荆州の李生といふ者の妻、焼餅の中へ見輩の糞を入れて姑にふるまふたれば、活ながら狗に成たと勤徳政事に記してある、これは悪業力が強きによりて、定業を轉じたる例なり

まづ一通なれば醜容も生れかはらねば、美しいみめかたちにはなられず、又人間の境界が直に狗になるものでもなければ、右の如く此生に於て直に變じたは、誠に今の業力の純一にして、尤も強ひからのことである、これらの因縁佛經祖論は勿論のこと、俗書にもあまたあることなれば、よみて考へ知るがよい（此類の事例は書物でなく、今の世間に甚だ多き事なり、されども皆人の事の様に思ふて、己れに反省するものはない）、然れば善業によらず惡業によらず、すべて今日の勤め行ふ業力の強き時には、轉じ難き定業をも順に轉ぜらるゝことなり、爰に一つ人々心得てをらねばならぬ事がある、銘々が過去でみづから、拵へ置て生るゝより死ぬるまで定た福分がある、これは求めて到來するでもなく、求めぬとて到來せぬでもなひ、是

生得命分

生得命分

を生得命分といふ、たとへば百年の壽命ある人、一りまへに米千石の生得命分があれば、一年に十石つゝ用ひて百年まで不足なしにくらすといふもの、又それを一年に廿石づつ用ひて使ひ過せば五十年の間に盡てしまふ、志からば末五十年はなんでも命を繋ひだものであらふ、壽命がちいまるか、又は渴命に及ぶか、或は人の物を使ふて債めになるか、それより外のことはない、若又身を慎み福をおしみて、一年に五石宛に用ひたらば、百年が間用ひてもまだ五百石の餘分がある、さすれば壽命を延て用ひるか、又は來世へ持ち送るか、何れ空しくなるといふことはない、若き時貧乏しても、老年に及で富貴なるものは、生得の福を末に送たといふもの、或は若き時分外ゆたかにして、老年に貧窮なるは、命分を先に取越したといふ者なり、人々どれ程の生得命分ぞとも知れぬものなれば、衣食住の三つの上は勿論、其外何によらず平生心をつけて、華麗を好まず、自分の身を約めて人を賑はし、施を行ふて福分を積む様にするが肝要なり

孟子の儉にして施を好むといはれたるこの道理にて、隨分なるだけ自身を儉約すれ

因果の根

ば、相應に人にも施さるゝものなり、只万事につけて身を高ぶらず、人にへり下り敬ひ讓るの道を知りて、一切の上に欲少なかれ、足ることを知れとある、少欲知足の誠めを根本とさへすれば、福分壽命はちのづから増長して、畢竟じては無上の佛果をも圓成することなり、まかし佛果を圓成するには因果の本を明らめねばならぬ、最初の因は誰がいつの世に蒔そめしぞ、次第にその果を受るからには最初の因なくては叶はぬ、こゝ知らぬときは、假令極樂へ往てもやはり極樂の凡夫といふもの、又こゝさへ正かに合點すれば、地獄に入ても三禪天の樂みの如くである、若しこゝ知りたく思はば、よのつね是非善惡の念の起るにつけて、この念はどこから起るぞと怠慢なく氣をつけて見るべし、此處を正かに辨まへれば直に其儘佛境界なり

今幸に受け難き人界に生を受け、殊に逢ひ難き佛法に逢ひ奉りたは、此上もなひ有り難き大幸なれば、此時を取り外さぬ様に信心決定して、因果の道理を辨まへ、更に因果の本をも明らめ得て、普く一切衆生と等しく佛道を成ぜんことを希ふべ

し

老婆親切の談既に斯の如し、而して此中に説く所はみな因果の道理のみ、その謂ゆる因果の本とは何物なるぞ、未だ之を説き明さず、是れ他なし眞如平等なる本覺明妙の一心なり、この一心は因果の本體にして、不生不滅不變不異なるものなり、この心地と徹底悟り得たる人を佛と名く、これに迷ふ人を凡夫と名く、迷の心とは貪欲瞋恚愚痴なり、是を三毒煩惱と云ふ、この煩惱あるものは如何に學問がありても、位階がありても、釋尊の眼光より照すときは皆哀れなる凡夫と云ふものなり、一休和尚の歌に「轉ありて凡夫心のなかりせば、本來空の無相眞佛」とその本來空と云ふは、三毒煩惱の空なるを云ふ、煩惱空なるは無相眞佛なり、人々本來無相眞佛なることを知るべきは、凡夫心の起るべき筈はなけれども、之を忘るゝが故に、日々夜々三毒の爲に身を害せらるゝなり、古歌に云く「何に見ても何を聞てもなさげなや、たゞ煩惱に身をまかすゆゑ」と眞に然り、凡夫なるものは朝より夜に至り生より死に至るまで、見聞覺知する所のもの悉く煩惱ならざるはなし、又次に

一休の歌

○行誠上人三世因果の理を論じて云く

夫れ三世とは過去現在未來と云へることは、獨り人界の前生後生を云へるのみに非ず、天下の衆物總じて此三世あらざるの道理なきなり、因果とは因は因種にして由て起る所の名なり、果とは結果にて結極に在て顯はるゝ者の姿を云ふ、此因果に二種あり、一には惡の因果なり、二には善の因果なり、惡因とは十惡を云ふ（殺生、偷盜、邪淫、妄語、惡口、兩舌、綺語、貪欲、瞋恚、邪見）惡果とは四惡趣の果報を感得するを云ふ（地獄、餓鬼、畜生、修羅）此惡因あれば此惡果を感ず、善報を植れば莖も葉も辛が如し、善因とは十善を云ふ、（十惡の反對なるもの）善果とは或は人界或は天界、或は此善を回向して淨土の妙果報を感得するを云ふ、此善因あれば此善果の酬報あり、砂糖を植れば莖も葉も皆甘きが如し、此甘辛苗芽を殊にするの道理を辨ずれば、三世因果の理に於て毫も疑を容るゝ所なきものと知るべし、積善之家ニ必有餘慶、積惡之家ニ必有餘殃、と繁辭にいはれしは尤のことなり、此法善惡の差別あり、苦樂の相を異にするを以て、概して俗語差別の法門と名く、

過去未來を疑はば昨日明日をも疑ふべし、其見るに及ばざればなり、善惡因果を信ぜざるは、辛甘の差別の味を知らざるなり、これ天然の常理に味しとす、是の如きはすべて至惡の人と名く、經中に此を邪見の人と名く、おそるべき憐れむべきの輩なり、因果經の中に此を説くこと具なり、彼の九十六種の外道中に在ても、いさゝか善惡因果に似たる説なきにあらず、然れども佛經に比するに、曲直精麁同日の談に非ず、短長邪正天淵を異にす、經に説て此を邪因果と斥す』

因果の理は諸教諸學に於て、多少之を論ぜざるにあらず、佛敎の如く詳かならず、何となればその因果只現在のみに止まりて過去未來を説くことなきが故に、因果の源底を盡すこと能はず、その源底を見るの明なきが故に、その説く所明らかならず、故に邪因邪果と名く、然るに佛陀は三世了達の大活眼を開て、因果の源底を盡されたるが故に、その説く所一々分明ならざるはなし、故に之を正因正果と名く、復次に

○白隱禪師の施行歌に云く

今生ふう貴するひとは
 未来は極めて貧なるぞ
 利口で貧乏するを見よ
 富貴に大小あることは
 よい種擇で蒔きたまへ
 田畑に麥稗まかざして
 五升や一斗は實るぞや
 いわむや施し多ければ
 施しせよとすゝめたり
 各々富貴で持たから
 持子が持ねば持ぬもの
 我子の繁昌いのるなら
 我子に譲りて怨となる

前世に蒔をく種がある
 利口で富貴が成ならば
 この世は前世の種次第
 蒔たぬ大小あるゆゑぞ
 種を惜みてうへざれば
 麥稗取たるためしなし
 まかれれば少しの施しも
 果報も多しと計りしれ
 さすれば乞食非人まで
 有ば有ほどたらぬもの
 少しも田畑ゆづらぬと
 ひとを倒さず施行せよ
 ひとの恨のかゝるもの

今生ほどこしせぬ人は
 鈍なるひとはみな貧か
 未来は此世のたぬ次第
 此世は僅のものなれば
 穀物取たるためしなし
 麥ひへ一升まきをけば
 果報は倍々あるものぞ
 それ故お釋迦も觀音も
 救ふところを發すべし
 多くの寶をゆづるとも
 持子はあつばれ持者ぞ
 人をたをして持たから
 ゆづる我子が沈みきる

ますや秤やそろばむや
 あまり非道な利を取な
 屋敷は草木が生まげる
 世間に數々あるものぞ
 もし又親にはなれば
 むらひ風をも厭ひしぞ
 ちやに不孝な人々は
 惜むたからはなき物ぞ
 飢死ぬひとを助けなば
 死で身につく物はなし
 冥土の旅立するとき
 闇をやみぢに入る事ぞ
 菩提の種をうへたまへ

筆の非道はまたまふな
 死で三途に入ることぞ
 非道は子孫の害となる
 一門はむ昌することは
 ますく重恩思ひしれ
 それ程親にもはれて
 庶やからすに劣りたり
 親の後生のためならば
 これに勝れる善事なし
 つまも子供もせに金も
 耳も聞へず目も見えず
 その時後悔かぎりなし
 命はもろきものなれば

つねく商ひする人も
 其身は三途に落入りて
 親の悪事が身にむくふ
 親が悪事をせぬゆゑぞ
 子を慈しむちやこころ
 親を思はぬをろかさよ
 娘むす子をまつけるに
 その金出して施行せよ
 たどひ万貫長じやでも
 捨て冥土のたびだちぞ
 行衛まらずに門をいで
 どかく命のあるかぎり
 つゆの命となづけたり

今宵頭つふが仕初めて
 暮に頓死をするもあり
 然れば頼みなき娑婆に
 貧者に施しせらるべし
 狗でも口はすぐるぞや
 いへ繁きいの御所勝ぞ
 天魔外道はよりつかず
 恵ほどこしならぬとは
 くらすころは鬼神か
 寶は餘りはなきものぞ
 上たる人をはじめとし
 厚く修行に身を入れよ
 平生貧者にうやまはれ

きう死一生なるもあり
 けふは他にんを葬禮し
 金銀たくはへ何にする
 貧者に施しせぬひとは
 飢人貧者をたすくべし
 慈悲善根をするひとは
 然れば所勝に成まひか
 餘りごふ慈目にあまる
 慈悲善根のなきひとは
 修行で借銭ははじめよ
 頭だつたるひとくは
 貧者のいのち救ふなら
 身につく果報有まいか

強ひ自慢をするひとも
 明日はわが身の葬禮ぞ
 富貴さいはいある人は
 富貴で暮す甲斐りなし
 慈悲善根はそのまゝに
 神やほどけに守られて
 能く料簡せらるべし
 飢死ぬ貧者を見ぬ振に
 子孫繁じやう長からじ
 夫こそまことの信心よ
 われもくど共くくに
 廣大無への善事なり
 ひどの喰物すつるのを

好むで拾ふて喰ものは
 前時に時種たらぬゆゑ
 是非なく袖乞する事ぞ
 加ふる有様見ながらも
 そのく仁心起らぬか
 兎にも角にも人として
 信心なければ人でなし
 この節信心おこらぬは
 全く牛馬にことならず』

是れ唯修行の功德を説き教へたるが如くなれども、因果の理を顯はすこと甚だ分明なり、故に此を茲に掲げたり

◎問ふ 善惡因果の道理略ぼ之を了解せり、されども以上の談はみな佛者が釋迦牟尼の教意を布演したるに過ぎず、乞ふ少しく佛説の肝要なる明文を示せ

◎答ふ 佛説の明文は甚だ多くして、一々之を示し難しと雖も、茲に一二の金文を抜萃して、参考に供せむ

○佛説因果經に曰く、過去の因を知むと欲せば、其現在の果を見よ、未來の果を知むと欲せば、其現在の因を見よと

○佛説三世因果經に曰く、汝等當に知るべし、過去に因を種て無量劫を経て、終に磨滅せずと

○佛説守護經に曰く、一切の罪惡は因果を信ぜざるを以て根本と爲すと

○佛説大寶積經に曰く、假令百劫を經るとも、所作の業亡びず、因縁會遇するるとき、果報還て自ら受くと

○佛説泥洹經に曰く、父不善を作すとも子代て受けず、子不善を作すとも父亦受けず、善は自から福を獲、惡は自から殃を受くと云々

○毘那耶律の偈に曰く、前世の事を知らむと欲せば、今生の受る者はなり、未來の因を知らむと要せば、今生の作す者はなりと

○善惡因果經に曰く、阿難佛に白して言く、世尊今も世間等同一種にして、生じて人中に在るを見るに、好あり醜あり、強あり弱あり、貧あり富あり、苦あり樂あり、貴あり賤あり、音聲不同にして言語殊方なるあり、百歳にして死せざるあり、二十にして早く亡するあり、十五にして夭喪し、胞胎(母の胎内にて死するもの)にして墮落するあり、端正にして貧賤なるあり、醜陋にして富貴なるあり、大強にして下劣なるあり、軟弱にして上位に登るあり、苦で長壽なるあり、樂で命短(短命なる

今世の果
種類万差

もの)なるあり、善を行じて過を致すあり、惡を作して福利なるあり、乃至短小なりと雖も而も意氣の足るあり、長大なりと雖も、他の僕使となるあり、男女に豐饒なるあり(男子女子の多くあるもの)孤單獨自なるあり(子供なきもの)少き時貧賤にして、老て始て富者(慶と同じ)なるあり、理實にして幸無きあり、横しまにして獄事に罹るあり、父慈あり子孝あつて經を論じ義を説くあり、兄弟乖き各鬪諍するに至るものあり、乃至自ら舍屋無ふして處々に浮寄するあり、文字をも識らず、端坐して報を受るあり、客作にして地無きあり、聰明高爽なるあり、闇鈍無智なるあり、經營して始て得るあり、求めざるに自から至ることあり、富で慳貪なるあり、貧窮にして施を好むあり、言を出して和睦なるあり、語を發して棘刺(暴戾にして親みなきを云ふ)他の爲に敬愛せらるゝあり、衆人に遠避せらるゝあり、慈心にして命を養ふあり、殺生無比なるあり、婦と姑と相憎むあり、喜で法語を聽くあり、經を聞て睡眠するあり、畜生の形と作て種々の異類なるあり、唯願くは世尊廣く因果を説き玉へと

端正の因 醜陋の因 貧窮の因 高貴の因 下賤の因 長大の因 瘡癩の因 耳聾の因 缺齒の因 無子の因 有子の因 短命の因 大富の因 聰明の因 開鏡の因 奴婢の因 躁狂の因

佛阿難に告げ玉はく、汝が所問の如く、受報不同なるは皆先世の用心等しからざるに由る、是を以て受る所千差萬別なり(讀者靜かに觀察すべし)

△今身に端正(器量)のよきもの(なるものは忍辱の中より來る△人と爲り醜陋(無器量のもの)なるものは瞋恚(怒り腹立ち)の中より來る△人と爲り貧窮なるものは、慳貪の中より來る△人と爲り高貴なるものは禮拜の中より來る△人と爲り下賤なるものは、憍慢の中より來る△人と爲り長大なるものは恭敬の中より來る△人と爲り瘡癩なるは勝法の中より來る△人と爲り耳聾なるは、開法を喜まざる中より來る△人と爲り缺け齒なるは、喜で骨肉を咬む中より來る△人と爲り男女無きものは他の諸鳥の子を殺す中より來る△人と爲り見息に饑きものは、喜で物の命を養生する中より來る△人と爲り長命なるは慈心の中より來る△人と爲り短命なるは殺生の中より來る△人と爲り大富なるは布施の中より來る△人と爲り聰明なるは學問誦經の中より來る△人と爲り開鏡なるは畜生の中より來る△人と爲り奴婢なるは貧賤(借財)の中より來る△人と爲り躁狂(さはがしくくるふ)なるは彌猴の中より來る△人と爲

惡性の因 根具の因 不具の因 多食の因 短舌の因 鵝鴨の果 雀鳥の果 木虫の果 野狐の果 刀山劍樹 地獄の原 因結果

り惡性(根性の惡きもの)なるは蛇蝎の中より來る△人と爲り六根具足するものは持戒の中より來る△人と爲り諸根不具足なるものは破戒の中より來る△人と爲り歌舞を好むものは伎見の中より來る△人と爲り多食なるは狗の中より來る△人と爲り口氣臭きものは惡罵の中より來る△人と爲り舌の短きものは、屏處(隠れて)にして尊長を盜罵する中より來る△人と爲り喜で他の婦女を姪するものは死して鵝鴨の中に墮す△人と爲り喜で九族の親を姪するものは死して雀中に墮す△人と爲り經書を憚惜し、智慧を藏匿して人の爲めに説かざるものは、死して土木の中の虫と作る△人と爲り喜で殃禍の語を作すものは、死して野狐と作る云々、又説て云く今身に衆生を屠殺し斬截するものは、死して刀山劍樹地獄の中に墮す、今身に多婦を畜ふものは死して鐵磔地獄の中に墮す、今身に多くの夫主を畜ふものは、死して毒蛇地獄の中に墮す、今身に酒を飲で醉亂するものは死して飲銅地獄の中に墮す、今身に後母と作て前母の兒を諛尅(まゝ子ころし)するものは、死して火車地獄の中に墮す、今身に兩舌して鬪亂するものは、死して鐵犁地獄の中に墮す、今身に惡口

して人を罵るものは、死して拔舌地獄の中に墮す、今身に妄語多きものは、死して鐵針地獄の中に墮す云々

佛阿難に告げ玉はく、向きに説く所の如き種々の諸苦は、皆十惡の業に由る、上は地獄の因縁、中は畜生の因縁、下は餓鬼の因縁、中に於て

△殺生の罪能く衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得、一には短命、二には多病

△劫盜の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得、一には貧窮、二には共財に自在を得ず

△邪淫の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得、一には婦貞良ならず、二には二妻相諍ふて己が心に隨はず

△妄語の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得、一には多く誹謗せらる、二には恒に多人の爲に誑らかさる

△兩舌の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果

短命多病の因

貧窮の因

不貞の因

誹謗の因

破壞の因

誹謗の因

不信の因

貪財多求の因

傷害の因

詭曲の目

報を得、一には眷屬を破壊することを得、二には弊惡の眷屬を得る、

△惡口の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得、一には常に惡聲を聞き、二には所有言説恒に諍訟あり

△綺語の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報あり、一には正を説けども人信受せず、二には所有言説辨了すること能はず

△貪慾の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得、一には貪財厭足あること無く、二には多求にして恒に意に従ふこと無し

△瞋患の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得、一には常に他人の爲に其長短を求められ、二には他の爲に傷害せらる

△邪見の罪も亦衆生をして地獄畜生餓鬼に墮せしむ、若し人中に生ずれば二種の果報を得、一には常に邪見の家に生れ、二には心恒に詭曲す

諸の佛子是の如き十惡業道は皆是衆苦大衆の因縁なりと」其時に大衆の中に十惡業を作る者あり、佛の所説を聞て皆大に號哭して而も佛に白して言く、世尊弟子何の

道元の歌

善行を作してカ斯苦を免かるゝことを得むと云々
 以下又善業を説て悪果を免かるゝの方法を説き玉ひたれども、冗長を恐るゝが故に茲
 に之を省くと雖も、只十悪業を止むれば十善行となるのみ
 道元禪師の云く、大凡因果の道理歴然として私なし、造惡の者は墮ち、修善の者は
 陞る、毫釐もたがはざるなりと「賊に然り、弘明集に云く、糠芥の惡は隠切にも亡び
 ず、毫釐の善は積世永く存ず、福成れば天堂自から至り、罪積めば地獄斯に臻ると」
 されば地獄天堂は吾等が一念中に現するものなることを知るべし、事林廣記に云く、
 善に善報あり、惡に惡法あり、善惡報ふこと無きは、時節の未だ到らざればなり、天
 網恢々疎にして漏さず、善惡若し報ふこと無くむは、乾坤も必ず私あらむと「され
 ば善惡因果の理廣大無邊なりと雖も、畢竟吾等の一心にありて浮沈出沒を爲すものな
 り、故に恐るべきも因果なるべく、喜ぶべきも亦業報なるべし、此因果と業報とは影
 の形に隨ふが如く、響の聲に應ずるが如し

因果の枝折終

明治二十六年十二月七日印刷

明治二十六年十二月十日發行



編述者

高田道見

發行者

今村金治郎

印刷者

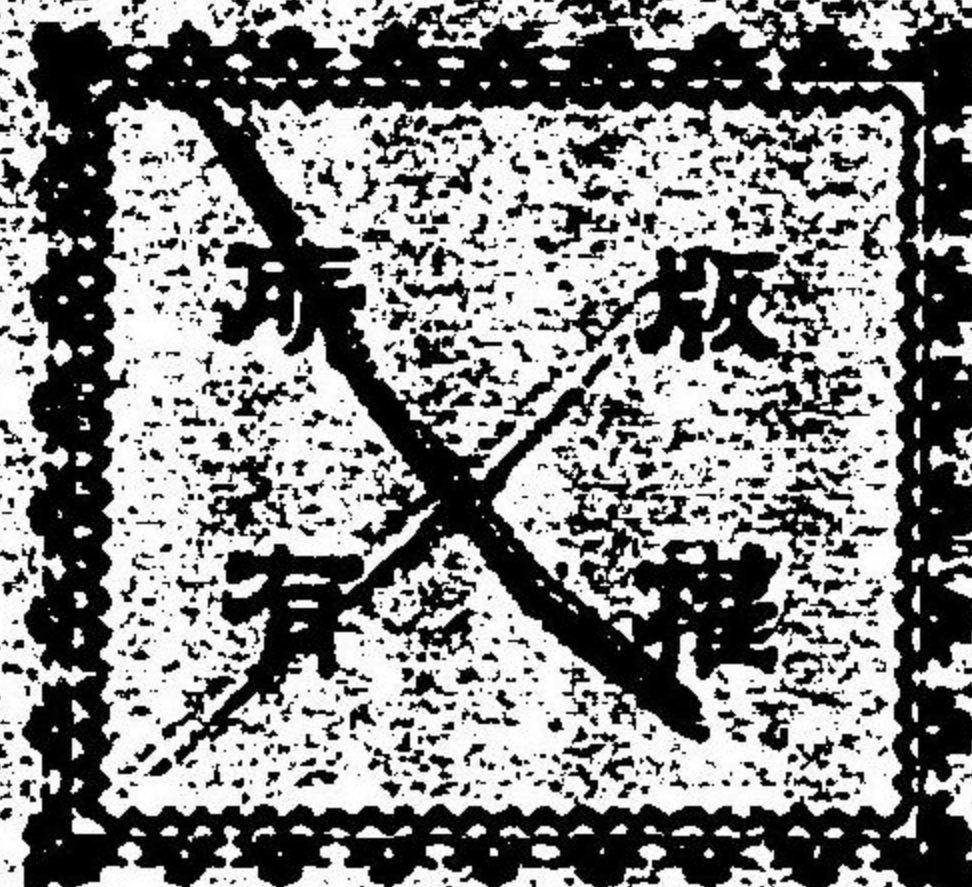
根岸高光

印刷所

秀英舎工場

發行所

鴻盟社



東京市牛込區市ヶ谷四丁目一
 東京市牛込區市ヶ谷四丁目一
 東京市芝區芝一丁目
 東京市芝區芝一丁目

善行を作してか斯苦を免かるゝことを得むと云々
 以下又善業を説て惡果を免かるゝの方法を説き玉ひたれども、冗長を恐るゝが故に茲
 に之を省くと雖も、只十惡業を止むれば十善行となるのみ
 道元禪師の云く、大凡因果の道理歴然として私なし、造惡の者は墮ち、修善の者は
 陞る、毫釐もたがはざるなりと「賊に然り、弘明集に云く、糠芥の惡は歴劫にも亡び
 ず、毫釐の善は積世永く存ず、福成れば天堂自から至り、罪積めば地獄斯に臻ると」
 されば地獄天堂は吾等が一念中に現するものなることを知るべし、事林廣記に云く、
 善に善報あり、惡に惡法あり、善惡報ふこと無きは、時節の未だ到らざればなり、天
 網恢恢疎にして漏さず、善惡若し報ふこと無くむは、乾坤も必ず私わらむと「され
 ば善惡因果の理廣大無邊なりと雖も、畢竟吾等の一心にありて浮沈出沒を爲すものな
 り、故に恐るべきも因果なるべく、喜ぶべきも亦業報なるべし、此因果と業報とは影
 の形に隨ふが如く、響の聲に應ずるが如し

因果の枝折終

明治二十六年十二月七日印刷

明治二十六年十二月十日發行



編述者

高田道見

一 東京市芝區愛宕町二丁目二十七番地

發行者

今村金治郎

一 東京市芝區愛宕町二丁目一番地

印刷者

根岸高光

一 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目二十三番地

印刷所

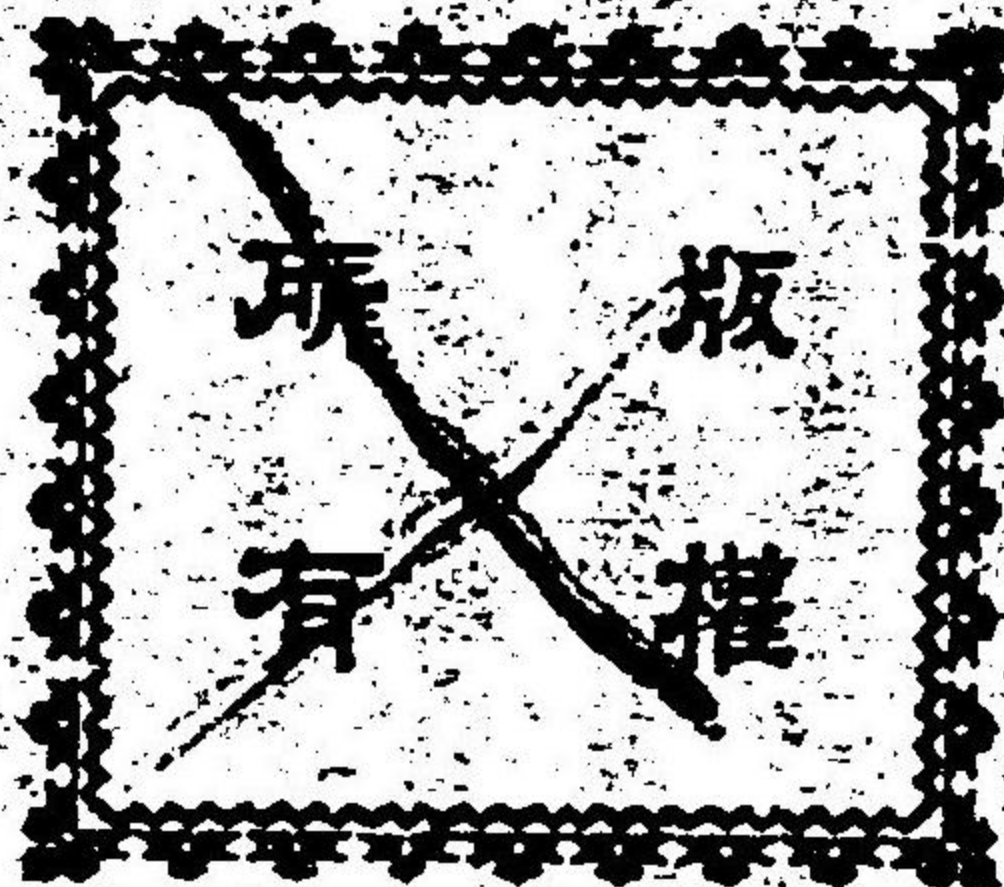
秀英舎工場

一 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發行所

鴻盟社

一 東京市芝區愛宕町四丁目一番地



儒釋道三つ
の教の別な
らず善に善
報悪に悪報